

6. 野田音三郎や井出百太郎、森俊肇らの鮑漁業

サンディー・ライドン著『モントレイ湾地域の日本人』(『The Japanese In The Monterey Bay Region』・キャピトラブックカンパニー刊 1997 年)には、小谷省三の証言をベースに、1898 (明治 31) 年ポイントロボスにおいて器械式潜水による採鮑が始まった経緯が記述されている。

「…小谷源之助の息子である小谷省三 (故人) によれば、仲治郎とともにポイントロボスに来た 3 人の海士がまず気付いたのは鮑漁には海水が冷た過ぎることだった。頭から身体全体を木綿の布で何重に覆っても、冷た過ぎて潜れないこともあった。小谷兄弟がこれを千葉に伝え、1898 年後半に、海士たちが潜水器のヘルメットを持参するようになったが、これは経済的成功には至らなかった。1900 年前後に、ポイントロボスの地主であった A. M. アーレンと小谷源之助が協力することになり、少しずつ進展がみられるようになった。当初、ポイントロボスで採られた鮑は、乾燥させて日本や中国に輸出するか、カリフォルニアで米国市場向けに販売された。しかし、アカネアワビはかなり大きく、適度に乾燥しているかどうかを判断するのは容易ではなかった (水分が多いと腐ってしまい、乾燥しすぎると硬くて切れなくなってしまう)。そのため乾鮑に携わった関係者は缶詰にして保存する方法を探し求めていた。1900 年前後に鮑を缶詰にしようといくつかの試みがなされ、最終的には小谷とアーレンがポイントロボス缶詰会社を設立…」という内容である。

1981 年の省三のインタビュー証言では、野田が 1895 (明治 27) 年日本政府に「鮑潜水漁のやり方」などについて手紙を出したとこれまで聞いたことがない話があった。「…最初パンフィックグロブへ行き、そこに 1 年住み…ポイントロボスへと出て来て鮑漁を始め…当初、2、3 人の潜水夫を連れて…素潜りを行い…しかし水は大変冷たく…彼は父親に、つまり私の祖父に手紙を書き…祖父は海産物を商い、ヘルメット潜水、深海潜水用具類を所有していたので、彼はそれらをこちらに、その装置を全て、深海潜水、空気ポンプ、古いポンプではあったが、それにホースをこちらへ送り…鮑漁を始めた…」という話も極めて重要である。

サンディー・ライドンは著書で「…小谷兄弟がこれを千葉に伝え、1898 年後半に、海士たちが潜水器のヘルメットを持参するようになった…」という点では、具体的にどういう経緯で持参してきたかが書かれていない。省三にインタビュー証言では、源之助が父親に手紙を出し器械式潜水器一式を送ってもらったと、より具体的な内容になっており、これまでにない重要証言となる。

野田や井出が資金を出し磯部が購入した潜水器とされてきた。もし違うならば採鮑業の主体が誰であったかとなる。省三の証言通りならば、野田や井出が事業を立ち上げたとしても、器械式潜水用具の準備は小谷兄弟がおこなったとなれば、ポイントロボスでの鮑漁業開始の説明が違ってくる。省三の証言を含めて野田が鮑漁業を始める際に、どのような対応であったかを文献や聞き取りなどを再検討していきたい。

源之助や仲治郎らが渡米した前後のことは、アメリカ側からの資料や聞き取り証言、あるいは日本人が書いた移民に関わる米国見聞録などで調査研究がおこなわれてきた。なかでも源之助や仲治郎らが渡米した経緯を取り上げた大場俊雄著『房総の潜水器漁業史』(崙書房ふるさと文庫 1993 年)の「VI. カルフォルニア州へ伝播した潜水器漁業技術」の項は基本的な文献である。

渡米に関わり取り上げられている人物が「野田音三郎」である。野田という人物は、1864 (元治元) 年に佐賀県牟田辺村の石井家に生まれ野田林右衛門の養子となっている。1889 (明治 22) 年渡米しサンフランシスコを拠点に、各種農園作業や山林開墾事業に従事していたが、劣悪な労働環境を改善するため労働団体を結成するなど、日本人労働者の地位向上と職場開拓に務めたといわれる。

その後、開墾事業を続けながら 1898 (明治 31) 年モントレイ湾で日本人による本格的な漁業を

開始し、乾鮑や鮑缶詰など加工品の製造に取り組んだ。日本が日露戦争に勝利した 1905 (明治 38) 年頃から排日の動きが高まると、各地方にあった在米日本人協議会を連携させ、在米日本人協議会を結成するとともに、代表としてワシントン駐在大使青本周蔵に面談し、排日問題の解決を働きかけるなどに尽力していた。1913 (大正 2) 年、カリフォルニア州日本人中央農会が設立されると会長に就任し、稲作にも取組んでカリフォルニア米生産への道を聞いた。1915 (大正 4) 年、サクラメントにおいて 52 歳で死去した。(参考・佐賀県人名辞典・佐賀県電子書籍ポータルサイト)

加藤十四郎によって「野田音三郎君傳」(『在米同胞発展史-附・名士列伝』博文館・1908 (明治 41) 年) が書かれたのは、鮑漁は許可制となって規制が強化された時期であり、43、4 歳頃の野田がマルパスという人物と鮭や鮑などの缶詰会社を共同経営していた。なお、モントレイは野田たちが来る前、中国人漁師たちが鮑漁をしていた地域とされるが、野田の住んでいたパシフィックグローブ (ポイントアローズ) は、中国人のコミュニティがあったところで、中国人や日本人、その他ヨーロッパ系移民の漁師たちが混在していた場所でもある。

『在米同胞発展史』には、野田が「…モントレイの労働者中…漁師数名あり、日曜毎に鮮魚五六十斤を獲るや、君は彼等の説を徴し且種々調査…支那人、以太利人等斯業に従事して相當の利潤…初めて漁業開始の意を決せり、當時該地方水族…鮭、鰯、鯖、比目魚、黒鯛、珍鯛、鰻、烏賊、鰯なり…君は干鰻製造法に就き種々工夫…三十三年よりは罐詰製造業を創めたり…」とあり、いろいろな調査をして「…干鮑製造…」の事業としたのは、中国人漁師が干鮑を本国に輸出しているのなら、日本にも輸出できると思ったのかもしれない。当時、すでに海岸沿いの浅海の岩場にある鮑は枯渇すると喧伝されていた時期である。野田がマルパスと共同して鮭と鮑の缶詰製造のため、モントレイ水産缶詰会社を設立したのは 1902 (明治 35) 年のことで、モントレイでは初期に設立された缶詰会社といわれている。

野田のモントレイでの動きは、前述した大場俊雄の著書のなかでは『在米日本人史』(在米日本人会・1940 (昭和 16) 年) を取り上げて紹介している。第 3 章で取り上げた省三のインタビュー証言を参考にしながら検討してみたい。

まず『在米日本人史』には「…1898 (明治 31) 年モントレイ地方の農業開発者野田音三郎は…漁業に従事する事…採鮑業方面に於ても野田音三郎は其元祖であつて、1899 年頃より採鮑を試み干鮑として支那輸出を図つた。折柄加州は干鮑を法律を以て禁止したため罐詰に代へたるも販路少なく失敗であつた。其後採鮑業は井出、森等を経て小谷兄弟の白人と提携して調査と研究とを重ね、漸く収支相償ふに至り採鮑区域を拡大するに至つた…」とあり、別の項で「…1895 年 (明治 28 年) モントレイ市に近いカーメルのポイントロバスでは邦人の手による採鮑業が営まれていた。恰もこの事業は当時加州在留同胞指導者の一人であつた佐賀県人野田音三郎が画策創始した…」と記載されている。

つまり、採鮑業は最初に野田より始まり「1899 年頃より採鮑を試み干鮑として支那輸出」と記し、別のところで「…1895 年 (明治 28 年) モントレイ市に近いカーメルのポイントロバスでは邦人の手による採鮑業が営まれていた。恰もこの事業は当時加州在留同胞指導者の一人であつた佐賀県人野田音三郎が画策創始…」と採鮑業の開始年代が違っている。これはモントレイ (パシフィックグローブ) とポイントロバスの場所の違いがあつたかもしれないが、1895 年 (明治 28 年) の時期には「…ポイントロバスでは邦人の手による採鮑業…」はおこなわれていなかったと思われる。文脈からみて事実関係を確認しないでの編集があつたのではないか。

省三の証言では採鮑業をおこなっていたパシフィックグローブのモントレイと、カーメルのポイ

ントロボスという鮑生産地をそれぞれ区別しているが、他の文献の多くはモントレーとひとつの地名で括っているので、それぞれの著書では聞き取り証言を整理しなかったと思われる。

また、野田が「…日本政府に鮑潜水漁のやり方などについて手紙を書いた…」と省三が証言で述べている。しかし、『在米日本人史』では「…井出と諮つて日本より専門家を呼び寄せることとし日本で諸準備と機械の買付け等を磯部小哉に依頼した。磯部は農商務省へこのことを相談に及んだので、農商務省では当時千葉県にみた小谷源之助にこれを通じて渡米を促し…」となっている。野田自身が政府（農商務省）に相談したとは書かれていない。

井出は農商務省への相談した人物が「磯部小哉」とされるが、この人名は大場俊雄の調査で、正しくは「磯部水哉」とされている。「…磯部は農商務省へこのことを相談…」だけでなく、井出は磯部に「機械の買付け」を依頼している。商人であったとはいえ磯部が、本当に高価な器械式潜水用具一式の購入を引受けたであろうか。そして、農商務省へ行って専門家の派遣を相談したとあるが、その後、小谷兄弟になった経緯が記されていないうえに、「小谷は当時千葉県で潜水機を以て採鮑業を営んでみた」程度であるのが不思議である。

磯部水哉という人物は、井出と同じく静岡県人であり、井出より12歳年上であった。東京市芝区や日本橋区に住み、1879（明治12）年22歳のときに上海に、1881（明治14）年24歳のときに再び上海に商用で渡航していたという。この時期に対清国貿易では、輸出品の乾鮑の不良品が増え、先方から苦情が出ていたので政府は貿易推進のために農商務省を中心に品質向上に取り組んでいた。磯部がこのような問題に関わっていた人物であったとすると、農商務省との人脈はある程度あった可能性は考えられる。この点で農商務省との関係資料をさがしながら、引き続き調査研究を図っていく必要があると思っている。

1898（明治31）年、磯部は旅行目的を商業とする合衆国行き旅券交付を受け、井出と一緒にモントレーに出向き、井出水産部で採鮑漁や乾鮑製造を進めることになったと思われるが、その詳細はわからない。

1918（大正7）年頃、安房郡七浦村千田で書かれた『紀念記録書』（誤記や訂正部分があるので下書きと思われる）という小冊子には、井出百太郎のことが記載され、「…明治二十九年極月中亞米利加合衆國キヤリフォルニア州モントレー郡ロバートサイドに鮑採取業經營スベキ希望者静岡県井出村井出百太郎ナル者小谷兄弟諸水産物奇製ノ妙實ナルヲ傳知セラレ依テ經營試驗的小谷氏兄弟ヲ技手者トシ井出氏ヨリノ層托ヲ受ケラレ鮑採取労働者トシテ安田市之助、山本林治、安田大助右三名被雇サレ安房郡内ニテ渡米者ノ端緒デアツタ…」と書かれている。

この冊子には井出と小谷兄弟の関わりについて、1896（明治29）年12月カリフォルニア州モントレー郡ロバートサイドで鮑漁業經營を希望していた井出は、小谷兄弟が諸水産物加工技術に優れ確かなことを聞いたので、試みに小谷兄弟に技術者になることを依頼したとある。そして、鮑採り労働者として安田市之助ら3名を雇ったことから鮑漁師の渡米が始まったとの内容である。

ここには野田音三郎や磯部水哉、また農商務省の関わりは書かれていないが、もし事実であるとしたら、「明治29年12月…ロバートサイドで鮑漁業經營を希望していた井出…」が、「…試験的に小谷兄弟に技術者、援助者になるよう依頼…」したもの、実際には日本から小谷兄弟ら5名が渡米したのが1897（明治30）年なので、「試験的に」源之助が渡米して状況を手紙で清三郎に伝えて、仲治郎ら3名が器械式潜水用具一式を準備し、器械と一緒に渡米したということになるのであろうか。今のところ「モントレー郡ロバートサイド」という場所が特定できてはいない。

この冊子は、井出百太郎については多少の情報が書かれているので、渡米した潜水夫が井出商会

の時に伝聞したことを綴ったと思われる。ただ、千田区漁業組合小谷仲治郎組合長が潜水器械1台450円で購入した際の記録である。断片的ではあるが、内容は渡米していた仲治郎が千田に帰ってきて、千田区のために潜水器1台を根本区から買入れたという。かつて根本区も器械式潜水のために人材養成をして熟練させたことで村が栄えていったので、千田からも渡米する潜水夫を養成して村を栄えさせたいと、村の人びとの思いを代弁したのかもしれない。

『在米日本人史』には「…然るに其後に至り野田と井出との協力作業は分裂し井出はポイントロバースに採鮑業を起し、日本より潜水機並に漁師を呼び寄せ、野田も亦日本より漁師を雇って事業を拡張し、茲に於て両人は対立するに至つたが、井出は資金つづかず、1898年頃より桑港の森肇の融資によつて事業継続を図つたが遂に及ばず、ポイントロバースに於ける井出の採鮑業は、森及び野田の協力者小谷の手によつて経営されることとなつた…」とある。

井出百太郎のことは、大場俊雄が「米国アワビ漁業の経営者、井出百太郎」（『地域文化研究』八戸工業高専 地域文化研究センター・2010年）で整理している。それを参考にすると、1867（明治元）年静岡県の大淵村で後藤善藏の二男として生まれ、1878（明治9）年に井出角十の養嗣子となった。外国語に熱心な教育を進めていた静岡県尋常中学校に入学すると、アメリカ人教師との交流を深め卒業している。そして、1890（明治23）年に初めて渡米して以来、明治25年、27年、29年、31年、34年と計6回旅券が付与され、当時としては頻繁な往来をしている人物である。

井出は1892（明治25）年にサンフランシスコ市第6街201番に井出商店を開店するなど、輸出入品を扱う貿易商であった。『日本現今人名辞典』（1900（明治33）年）の「井出百太郎」には、「…貿易業に従事す君は学生を養成するを好み学資を投じて多くの書生を欧米に留学せしむ又好んで旅行しなし年度上半期は欧米間の商業に従事し下半期は東洋間貿易業を視察するを以て任務…」とあり、貿易を学ぶ学生のために奨学金を出して欧米に留学させるような企業人であったと紹介している。磯部水哉が若い時から度々上海に渡航し清国貿易に精通していたことから、井出はモントレイの乾鮑を清国に輸出するために磯部の支援や助言を求めたのではないだろうか。日清戦争前後で清国貿易を実施するため、「…東洋間貿易業を視察…」するとともに「…本業の外米国モントレイ郡のニヶ所に井出水産部を設け捕鯨、干鮑、肥料、魚油其他の海産業に従事…」したと書かれている。井出水産部にはモントレイ郡に施設「ニヶ所」といつているが、モントレイとポイントロバースであるかは不明である。

そして、『在米日本人年鑑』（明治39年）には「二十五年今の井出商會ハーワード街と第六街の角に設立された」と記載され、『現代人名辞典』、『東京社会辞彙』、『大正人名辞典』にも明治25年サンフランシスコに雑貨店を開業と書かれている。その後、市内の第6街からバッテリー街に店舗をかえて営業し、日本には東京日本橋区小舟町1丁目6番地や神戸栄町6丁目48番館に出張所を置き、様々な輸出入品目を扱っていたのである。井出百太郎は英語に堪能であり貿易業や旅行に精通した明治の国際人であった。

井出と野田はモントレイでの豊富な鮑をみて、缶詰や乾鮑の輸出構想をもった。小谷兄弟や海士が現地到着後、モントレイでの野田音三郎による採鮑に始まり、その後井出商会水産部がモントレイか、ポイントロバースで素もぐりによる採鮑業と乾鮑加工をおこなっていく。書簡類の日付からみて、1898（明治31）年9月頃、井出商会水産部が器械潜水による採鮑漁を導入していったと思われる。

だが実際には、器械式潜水による採鮑漁や乾鮑製造についての知識・技能がなかったので、長続きせず経営が不振となって共同経営を解消したとある。それぞれが資金のことや鮑資源保護ためと

された採鮑漁禁止運動に対抗できず、結局撤退して、小谷兄弟がポイントロボスで受け継いでいったのである。

第2章の源之助が書いた「陳情書」にあったように、源之助自らがモントレイでの採鮑業の始まりを「…此事業は私明治三十年、始めて当加州に於て潜水器を以て採鮑開始…」と書いている。省三の証言にあるように源之助がモントレイに着いてから「…最初パシフィックグローブへ行き、そこに1年住み…ポインロボスへと出て来て鮑漁を始め…当初、2、3人の潜水夫を連れて…素潜り…」をおこなっていた。そのパシフィックグローブの野田音三郎宅から父清三郎に手紙を出している。渡米した5名は野田のところで素潜りの鮑漁をし、ときには場所を変えてポイントロボスでも素潜りの鮑漁をしながら、海底の地形や海藻の分布など鮑の生態的な調査をしていた。その後、「…祖父は…ヘルメット潜水、深海潜水用具類を所有していたので、彼はそれらをこちらに、その装置を全て、深海潜水、空気ポンプ、古いポンプではあったが、それにホース…」など金澤屋から器械式潜水用具が到着し、野田の缶詰会社への鮑生産は、素潜りから器械式潜水による採鮑となったのではないかと。結局は、1年ほど野田と関わっていたのだろうか。

ポイントロボスの海が気に入ったとはいってもA. M. アーレンとの出会いがなければ、ポイントロボスでの鮑漁は不可能であり、土地所有者であるアーレンの許可がなければ、定住することも施設を建てることもできなかつたはずである。A. M. アーレンの理解を得て器械式潜水による鮑漁を始めただけでなく、アーレンが資金を出して小谷兄弟との共同経営でポイントロボス缶詰会社の設立ということになった。

省三がいうように、「…父が缶詰製造を始められた理由はアーレン氏でした。アレキサンダー・マクミラン・アーレンはこの土地を、つまりポイントロボス公園全体、このあたりの全ての土地を所有…父はアワビ缶詰製造業への参入を望んで…アーレン氏に話しをし、彼はここで缶詰製造業を始めようと言い…父はここに入って来てアーレン氏と共にビジネスを始め…（当時日本人が白人をもつことは稀であり）…パートナーシップでは父が全てを運営し、事業を引き受けました。アーレン氏が土地の所有者であることから、私たちは彼の許可を得て缶詰工場などを立ち上げ…」たという。

『在米日本人史』をみると「…採鮑業には日支人多数の漁夫が従事し、鮑は乾燥して日本にも送り…」という一文があり、前述の『在米同胞発展史』『野田音三郎君傳』にも「…支那人、以太利人等斯業に従事して相當の利潤…初めて漁業開始の意を決せり、當時該地方水族…鮭、鱒、鯖、比目魚、黒鯛、珍鯛、鰻、烏賊、鰯なり…君は干鰻製造法に就き種々工夫…三十三年よりは罐詰製造業を創めたり…」とある。野田は採鮑業より乾鮑製造に関心をもっていたような記述を感じる。そして、『北米踏査大観（上）』でも野田の採鮑業が「…始めて日本人の漁業に従事したるは、明治三十年野田昔三郎鮑の採收を始め、其後野田の去るや…」と、詳しい記述をしないままに途切れている。

第2章の「陳情書」のなかで、源之助自身が「…此事業は私明治三十年、始めて当加州に於て潜水器を以て採鮑開始…」と述べているので、そのまま「明治三十年…」という言葉を受け取れば、9月下旬にモントレイの野田宅に着いてから、直ぐにモントレイ半島周辺の海洋や鮑の調査をし、父清三郎に手紙を書き、仲治郎には金澤屋の器械式潜水用具一式を一緒に輸送したという可能性も考えられる。その輸送の際に米国への医薬品などの輸出に手慣れている川名又之輔などがアドバイスや支援をしたかもしれない。

ただ、器械式潜水用具一式を米国に持ち込むことに問題はなかったのか。また、その年の12月に仲治郎と海士らが器械式潜水用具を使用して、ポイントロボス周辺の鮑や海底の調査を無断で出

来るだろうか。もし、ポイントロボスでアーレンとの出会いがあれば、器械式潜水用具の持ち込みなどは可能であったであろう。あるいは農商務省水産調査所とスタンフォード大学ホプキンス臨海実験所が、共同してモンレー海域の調査研究に器械式潜水用具を使うとの名目的な理由があれば可能であったかもしれない。いずれにせよ、裏付けの資料がなく、それぞれを仮説としておきたい。

これまで『在米日本人史』のなかの「…井出はポイントロボスに採鮑業を起し、日本より潜水機並に漁師を呼び寄せ…」とか、資金が続かず「…ポイントロボスに於ける井出の採鮑業は…小谷の手によつて経営…」が取り上げられてきた。このことでは柏村桂谷著『北米踏査大観(上)』では、「…其後野田の去るや、千葉縣人小谷源助、カーメルの地に入りて、鮑の採收を爲し、之を罐詰及び干鮑として輸出し事業漸く盛ならむとするや、加州の法律は干鮑の製造を禁止したるを以て、現時は主として罐詰として、之れを支那及び日本に輸出…」と記されており、カーメルの地とはポイントロボスのことであるとわかる。

野田と井出の働きかけで小谷兄弟が渡米した「…明治三十年…鮑の採收を始めた…」場所が、野田の住むモンレーのパシフィックグローブとすると、第2章の「陳情書」のなかで源之助が「…此事業は私明治三十年、始めて当加州に於て潜水器を以て採鮑開始…」といているので、最初に器械式潜水の採鮑漁を始めた場所であろう。

その後、野田と井出はモンレーで経営的に分裂し野田が離脱したので、井出は水産部をポイントロボスに設立して、小谷兄弟らと採鮑漁を始めたのだろう。この時期、モンレー郡の人びとから鮑の獲り過ぎによる絶滅を憂える声があがる。そのことは新聞報道にも取り上げられ、『日本現今人名辞典』(の明治33年)には、明治「三十二年四月米國加州の縣會に於ひて井出水産部漁業禁止案の下院を通過しざるも氏の反對運動の結果なりと云ふ此年七月又モンレー郡會に於て加州縣會に提出せしも此れ又氏の反對運動によりて法律とならず一ヶ年米金六十弗(日本金百二十圓)の税金を郡に仕拂ふ事に修正せられたし」と書かれている。

『在米日本人史』には、採鮑漁を始めて間もなく資源保護ということで鮑漁業禁止や鮑の郡外搬出禁止を主張する動きが高まり、また1900(明治33)年頃には井出の資金が続かず、ポイントロボスでの経営を閉じたと記されている。井出の経営を受け継いで器械式潜水による採鮑漁や乾鮑加工業を開始したのは、サンフランシスコの森俊肇と小谷兄弟という。そして、注目されるのは「…採鮑業は…小谷兄弟の白人と提携して調査と研究とを重ね、漸く収支相償ふに至り採鮑区域を拡大…」という部分である。「…白人との連携…」とはアーレンはじめ学者研究者たちのことを指しているのだろうか。

大場俊雄は論文「米国でアワビ潜水漁業、干鮑加工業を営んだ護俊肇」(『地域文化研究』八戸工業高専 地域文化研究センター・2013年)で、サンフランシスコで森薬舗を営んでいた「森俊肇」を紹介している。護俊肇は1900(明治33)年頃、モンレーで野田や井出から鮑事業を引き継ぎ、小谷兄弟の器械式潜水による採鮑業を支援した人物であった。「護」の宛名で「小谷」宛への25日付書簡【174】がある。「…御養生專一に遊さるべく候…米国より書面には、三月末か四月上旬には、帰朝する様申参り候ニ付、一寸御通知申上候…」との内容だけで護俊肇を差出人とできるか。書簡の「御養生專一」との御見舞い言葉は誰にむけたかを推察すると、やはり1907(明治40)年3月「脳症」で村議を辞職した清三郎に向けたと思われ、護俊肇が御見舞いと帰朝の挨拶をしたものであろう。だが、源之助の弟小谷寿一の就職について、なぜか触れられていない。

寿一の清三郎宛ての書簡【21】の内容は、石田トミと結婚した寿一が夫婦で渡米して護俊肇経営の森薬店に勤めることになるが、渡米の手続きを報告している。「トミ入籍之義ニ付種々御心配…

謹啓 兼ねて御送附方相願へ置き候膳本、本日正ニ落手仕候間御通知…本日直々東京府ニ向へ提出…森氏之証明書には渡航費用一切を支給し呼寄候旨記入之あり…其筋より其等の件に付き取調…在京護夫人迄で届き…渡米之節ハ同人より受取る様…又川名方にて目下売薬商見習い中…」とある。寿一はトミと結婚し入籍したのが 1907（明治 40）年 1 月である。渡米にあたり書類や連絡などは在京していた護夫人が関わるとともに、渡米費用を一切負担してもらい、4 月 18 日に日本を離れた。そして、仲治郎の清三郎宛 6 月 29 日付書簡【222】では「…寿一事海上無事着米被致候趣き、安心仕り候、実ハ時節柄如何かと案じ居り候処、差支へなく上陸致し候義、誠ニ幸福ニ奉存候…宛名ハ森薬店方と致し置き候…」と、当時、排日風潮が強まり移民が難しくなっているなかで、寿一・とみ夫婦が無事、サンフランシスコに上陸し森薬店に着いたとの報告を受け安堵している。

柏村桂谷著『北米踏査大観』（1911（明治 44）年）によると、護俊肇の経歴は滋賀県長浜出身の 1860（万延元）年生まれであるが、1885（明治 18）年渡米し、ホテルや葡萄酒醸造場で真面目に働き、重要な任務に付いたことで特別の収入を得て、貯蓄した資金で材木輸出事業をおこなったとされる。しかし、失敗して再び古着類及び時計などを扱う仕事で資金を貯めると、海産物事業が儲かると聞き、小谷源之助とともにモントレイ付近で採鮑事業に取り組んだという。その後、海産物事業も不調になって撤退して、サンフランシスコの日本人社会に薬舗がなかったので開業したと記述されている。

だが、実際は旅券下付記録から渡米は 1897（明治 30）年 12 月 24 日であり、後の出版物が「森薬店」開業を翌 98（明治 31）年とし、住所はサンフランシスコ・デュポン街 527 番地となっている。数年後の日系新聞広告では「森薬舗」と改名し、引き続き「森」を商号としていた。薬舗経営をしながら護俊肇は、1900（明治 33）年にモントレイの採鮑業や鮑加工事業を井出商会から買取り、森合名会社水産部を設立したのである。ただ、日本への乾鮑輸送に失敗し、2 年も経たないうちに撤退したことで、小谷兄弟はポイントロボスの A. M. アーレンの支援を受けて、器械式潜水による採鮑業と乾鮑製造を受け継いでいったのである。